

6代目瀬川昌耆先生と東京大学小児科学教室初代教授弘田長先生

瀬川昌耆先生は東京帝国大学医科大学（現在の東大医学部）に国内初の小児科学教室を設立した弘田長先生と同時期に活躍されました。

「わが国の小児科学の初期に学会分野で弘田、民間臨床分野で瀬川が発展に寄与した図式が見いだせる。」
（『明治二十一年六月三日 鷗外「ベルリン写真」の謎を解く（講談社）』pp168より）

瀬川 昌耆

1882年5月 東京大学医学部卒業
1882年7月 宮城病院長 赴任
1886年 宮城医学校長兼附属医院長
1888年4月～1891年4月 ドイツ留学 フリードリッヒ帝立小児病院長のア・バギンスキーに師事する
1891年 第一高等中学校（現在の千葉大学）医学部の教授となる
1898年 東京市本所区に小児科、内科、外科を診療科目とする「江東病院」を設立
1905年 神田駿河台西紅梅町に小児医療をさらに充実させた私立小児科病院である「東京小児科院（のちの瀬川小児科病院）」を設立

書籍 1884年 小児科の教科書である『小児病各論（全2巻・弘文堂）』を出版
1905年 初期の育児書である『実験上の育児（全2巻・新橋堂書店）』を出版

弘田 長

1879年7月* 東京大学医学部卒業、助手としてユリウス・スクリバ教授のもとで外科を修行
1881年12月 熊本医学校一等教諭として赴任、外科を担当
1883年2月 熊本医学校附属病院長を兼任
1884年10月 熊本医学校 校長兼附属病院長 退職
1885年～1888年4月 ドイツ ストラスブルク医科大学留学
小児科のホルツ教授に就き小児科学専攻、小児科医になることを勧められる
1888年4月 東京帝国大学医科大学（現在の東大医学部）に国内初の小児科学教室が設立、主任に就任
1889年12月～1921年11月 東京帝国大学医科大学小児科学教室 初代教授になる

書籍 1888年 小児科学の教科書『兒科必携』を刊行

（参考）東京大学小児科学教室ホームページ
明治二十一年六月三日 鷗外「ベルリン写真」の謎を解く（講談社）

*弘田先生の卒業の年は東京大学小児科学教室ホームページでは 1879年、ウィキペディアでは1880年になっています。